［巻頭言］

新型コロナウイルス感染症拡大の影響における宗教の役割

浄土真宗本願寺派総合研究所所長　丘山願海

本号のテーマは「浄土真宗と新型コロナウイルス感染症（以下「新型コロナ」という）」としました。新型コロナが世界的に流行し、「非日常」が「日常」となりつつある現在、私たちは何を学んできたのでしょう？様々な識者たちがそれぞれに興味深い、有意義な意見を述べていますし、紀要本号でも宗教者の役割、あるいは宗教と新型コロナを論じてもらいました。

この状況の間、私はつぎの二つのことを考えさせられました。一つは「分断」ということです。新型コロナが流行する前から、経済の新自由主義の名のもとに、国家の枠組みを超える規制の効かない経済活動によって富が極端に偏在化するようになり、そのなかで人びとのあいだでの貧富の格差もはげしくなり、自由を根拠に自己責任が叫ばれていました。そんな中、「アメリカ・ファースト」「都民ファースト」といった言葉が人びとの心を惹きつけていました。これは、自分さえ、自分たちさえよければ、他人はどうでもいいという、「一切衆生と共に生きる」という仏教の基本思想と正反対の道を歩んでいく考え方だと、私は恐怖のような感じを受けたのです。そんな時代思潮のなかでの、新型コロナの登場でした。新型コロナワクチンの経済的な先進国の買い占めには、人間の本性を見

たような気がしました。自陣営以外のワクチンは効き目が薄いといったキャンペーンにも驚かされました。ワクチンで大儲けしようという企業や国家の思惑もあるような気がします。地球的規模のパンデミックのなかでも、人びとはそれに共に立ち向かおうとできないことを改めて知らされたのです。

「一切衆生は幸せであれ」と願った釈尊、国家や民族を超えて「一切衆生と共に」という菩薩の願いのなかに生きる私たち宗教者は、このような世界の精神的状況のなかで、具体的に何ができるのだろう？フッとそんな思いに駆られます。

もう一つは、私がここ十年ほど考えてきた「世界カルマ」という考えです。仏教的に考えれば、宇宙は成住壊空の四つの劫を一つのサイクルとして、永遠にそれを繰り返すのですが、多くの人に理解してもらうために、宇宙開闢、すなわちビッグバンから語らせてもらいます。私たちが存在するこの宇宙はビッグバン以来、一瞬も留まることなく（諸行無常）、ありとあらゆる存在が互いに関わりあいながら（縁起）、生成と消滅を繰り返して、今この瞬間にそれぞれがこのように顕現している。そのような宇宙あるいは世界の在り方を「世界カルマ」と呼びなしたいのです。私たちも、そしてすべての存在もそういう世界規模、宇宙規模のカルマを背景にして、今、ここに存在している。しかもこの時さえも一瞬も留まることはない。そんな規模で考えると、新型コロナだけに振り回されることなく、地球上の「誰一人取り残さない」を合言葉に、持続可能な世界を実現するために国連がＳＤＧｓとして推進する十七の課題に人類の叡智をもって取り組むことの大切さが改めて見えてきます。

これまで総合研究所『紀要』は、冊子体で皆様にお届けしてきましたが、諸般の事情により、今後はウェブ上での公開を原則とすることになりました。引き続きご清覧いただきますようお願い申し上げます。